

平成 2 2 年度

松山市議会議員海外都市行政視察報告書

トルコ共和国・ポーランド共和国

平成 2 3 年 3 月

松 山 市 議 会

目次

1	海外都市行政視察にあたって	1
(1)	目的	1
(2)	視察事項（調査研究テーマ）	1
(3)	期間	1
(4)	訪問国	2
(5)	視察派遣者名簿	3
(6)	事前勉強会等の開催実績	4
(7)	視察事項（調査研究テーマ）別役割分担表	6
(8)	視察日程表	7
(9)	出発式	9
2	海外都市行政視察 総括	10
	海外都市行政視察団 団 長 川本 光明	
3	視察事項の報告	21
●	親日国家トルコを訪ねて 副団長 土井田 学	22
●	トルコ共和国アンカラ市の議会制度等について 団員 大西 弘道	25
●	イスタンブール工科大学における防災対策について 団員 大木 正彦	28
●	人権、平和の原点。アウシュビッツ 団員 松岡 芳生	31
●	トルコ共和国の観光振興について 団員 清水 宣郎	34
●	トルコ共和国の観光客の動向とその取り組み 団員 砂野 哲彦	37
●	水資源対策について 団員 友近 正	40
●	人類の負の遺産、アウシュビッツを訪れて 団員 渡部 昭	43
●	トルコ共和国の水資源対策等について 団員 原 俊司	46
4	結び	49

1 海外都市行政視察にあたって

(1) 目 的

諸外国の都市との友好親善並びに相互理解を深め、政治、経済、文化、都市事情その他必要な事項を視察調査し、国際性の涵養と資質の向上に努め、その成果を市政に反映する。

(2) 視察事項（調査研究テーマ）

- ① 防災対策について
- ② 観光振興について
- ③ 平和行政について
- ④ 国際交流について
- ⑤ 水資源対策について
- ⑥ 議会制度について

(3) 期 間

平成23年1月23日（日）～1月31日（月） 9日間

(4) 訪問国

海外行政視察先については、事前勉強会において本事業の目的並びに本市の現状及び視察事項（調査研究テーマ）を鑑み視察団の総意で決定した。

トルコ共和国



人口約7,265万人、面積約78万3千平方km日本の約2倍。首都はアンカラ。民族はトルコ人（南東部を中心にクルド人、その他アルメニア人、ギリシャ人、ユダヤ人等）。国土の大半の部分はアナトリア半島にあたり、国民の99%がイスラム教（宗派はスンニ派が多数）を信仰する。

ポーランド共和国



人口約3,814万人、面積約32万3千平方km日本の約5分の4。首都はワルシャワ。民族はポーランド人。10世紀に建国。18世紀末には3度にわたり、ロシア、プロシア、オーストリア=ハンガリー帝国の隣接3国に分割され、第1次大戦終了までの123年間は世界地図から姿を消す。



(5) 視察派遣者名簿

平成22年12月27日現在

(12月定例会最終日承認)

NO	氏名	会派等	備考
1	川本 光明	自由民主党議員団	団 長
2	土井田 学	新風・民主連合	副団長
3	大西 弘道	自由民主党議員団	団 員
4	大木 正彦	新風・民主連合	団 員
5	松岡 芳生	新風・民主連合	団 員
6	清水 宣郎	自由民主党議員団	団 員
7	砂野 哲彦	自由民主党議員団	団 員
8	友近 正	新風・民主連合	団 員
9	渡部 昭	新風・民主連合	団 員
10	原 俊司	自由民主党議員団	団 員
11	渡部 俊明	議会事務局議事調査課長	随 行

派遣議員 10名

随員職員 1名

計 11名

(6) 事前勉強会等の開催実績

● 第1回打ち合わせ会

日時：平成22年 8月12日（木）午前10時

場所：第4委員会室

案件：海外行政視察の実施について

団長、副団長の選任

視察日程、視察内容（調査研究テーマ）、視察先について

その他

● 第2回打ち合わせ会

日時：平成22年 9月 3日（金）午前11時

場所：第1委員会室

案件：調査研究テーマ選定及び視察先の内定について

視察日程について

業者提案の提出期限並びに次回打ち合わせ会の日程について

成果報告の充実について

その他

● 第3回打ち合わせ会

日時：平成22年10月 4日（月）午前10時

場所：第1委員会室

案件：旅行業者企画書審査

視察内容（調査研究テーマ）、視察先について

その他

● 第1回勉強会

日時：平成22年10月 8日（金）午前10時

場所：第5委員会室

案件：最終行程と視察内容（調査研究テーマ）及び視察先について

その他

● 第2回勉強会

日時：平成22年10月27日（水）午後1時

場所：第1委員会室

案件：視察参加補充者の承認
学習会

- ・防災対策について
- ・観光振興について
- ・平和行政について

その他



（勉強会の様子）

● 第3回勉強会

日時：平成22年12月10日（金）午後 1時

場所：第1委員会室

案件：学習会

- ・国際交流について
- ・水資源対策について

調査研究テーマ担当者の決定

その他

● 最終打ち合わせ会

日時：平成23年 1月11日（火）午前10時

場所：第1委員会室

案件：視察行程等の確認

- ・視察行程確認
- ・調査研究テーマ担当者確認

視察参加にあたっての注意事項

その他

(7) 視察事項（調査研究テーマ）別役割分担表

視察事項（調査研究テーマ）別担当者については、総括の報告を行う団長を除く9人で6テーマを分担することとした。なお、より調査範囲の広い観光振興、平和行政、水資源対策については2人の団員で対応することとした。

NO	視察事項等	担当者	訪問国／視察先
※	総括報告	川本 光明	全般
1	防災対策	大木 正彦	トルコ共和国 イスタンブール ・イスタンブール工科大学 トルコ地震防災研究センター
2	観光振興	清水 宣郎 砂野 哲彦	トルコ共和国 アンカラ ・トルコ文化観光省
3	平和行政	松岡 芳生 渡部 昭	ポーランド共和国 アウシュビッツ ・アウシュビッツ強制収容所
4	国際交流	土井田 学	トルコ共和国 アンカラ ・土日基金文化センター
5	水資源対策	友近 正 原 俊司	トルコ共和国 カップドキア ・カップドキア市関係部署 ・カップドキア地下都市 トルコ共和国 イスタンブール ・ISKI（イスタンブール・カナリ ザション・イダレシン） （市水資源確保関連部署）
6	市議会制度	大西 弘道	トルコ共和国 アンカラ ・アンカラ市議会

(8) 視察日程表

NO	月日	地名	時刻	交通機関	日程
1	1/23 (日)	松山空港集合 松山空港発 羽田空港着 成田空港発 イスタンブール着 イスタンブール発 カイセリ着	07:05 08:05 09:25 14:25 20:05 22:15 23:35	航空機 航空機 リムジンバス 航空機 航空機 航空機 専用車	集合後、待合室で出発式 空路、羽田空港へ 着後、リムジンバスで成田空港へ 空路、イスタンブールへ (所要時間 12 時間 40 分) 乗り継ぎ、カイセリへ 《カイセリ泊》
2	1/24 (月)	カイセリ発 カッパドキア アンカラ着	09:00 午前 午後 20:30	 専用車	【調査・研究テーマ：水資源対策①】 カッパドキア地下都市視察 カッパドキア奇岩群視察 陸路、アンカラへ (所要時間約 5 時間) 《アンカラ泊》
3	1/25 (火)	アンカラ	午前 午後	専用車	【調査・研究テーマ：国際交流】 土日基金文化センター訪問 【研究テーマ：市議会制度】 アンカラ市議会訪問 《アンカラ泊》
4	1/26 (水)	アンカラ イスタンブール着	午前 20:00	専用車	【調査・研究テーマ：観光振興】 トルコ文化観光省訪問 陸路、イスタンブールへ (所要時間約 5 時間) 《イスタンブール泊》

1 海外視察にあたって

NO	月日	地名	時刻	交通機関	日程
5	1/27 (木)	イスタンブール	午前 午後	専用車	【調査・研究テーマ：防災対策】 イスタンブール技術大学訪問 【調査・研究テーマ：水資源対策②】 ISKI（イスタンブール・カンリガシオン・イダルシ） （市水資源確保部署）訪問 《イスタンブール泊》
6	1/28 (金)	イスタンブール発 ワルシャワ着 ワルシャワ発 クラフク着	07:15 10:50 12:25 15:00 16:05	専用車 航空機 航空機 専用車	空路、ワルシャワ乗り継ぎで クラフクへ （所要時間 2 時間 35 分）時差 1 時間 （所要時間 1 時間 5 分） 《カイセリ泊》
7	1/29 (土)	クラフク オシフェンチム ワルシャワ着	08:00 午前 19:30	専用車	【調査・研究テーマ：平和行政】 アウシュビッツ収容所視察 （現オシフェンチム） 視察終了後、 陸路、ワルシャワへ （所要時間約 5 時間） 《ワルシャワ泊》
8	1/30 (日)	ワルシャワ ワルシャワ発 イスタンブール着 イスタンブール発	午前 13:10 16:35 17:50	専用車 航空機 航空機	ワルシャワ市内視察（世界遺産） 空路、イスタンブール乗り継ぎで 帰国の途へ 《機中泊》
9	1/31 (月)	成田空港着 羽田空港発 松山空港着	12:25 16:50 18:30	リムジンバス 航空機	入国手続き後、リムジンバスにて 羽田空港へ 松山空港へ 着後、解散

(9) 出発式

日 時 平成23年1月23日(日) 午前7時30分から

場 所 松山空港2階 「待合室B」

出席者 議 会：田坂議長 議会事務局長 事務局職員
理事者：理財部長 財政課職員 外

次 第 1 田坂議長あいさつ
2 川本団長あいさつ
3 団員自己紹介



(田坂議長のあいさつ)



(川本団長のあいさつ)



(団員の自己紹介)



(出発式の参加者)

2 海外都市行政視察 総括

団 長 川本 光明

松山市議会議員の改選にあたる平成22年度、前任期中からの懸案であった松山市議会議員海外都市行政視察の取り扱いについて、組織議会終了後の6月定例会の会期中、早速に各派代表者会議において内容見直しあるいは廃止案も含んだ検討がなされた。各会派の代表がそれぞれの会派に本件を持ち帰り、再度、意見を持ち寄るも意見の一致を見ず、その後、議長における調整が図られ、最終的には経費縮減や報告手法の見直し、成果反映など、各会派のさまざまな意見を見直し項目として取り入れるということで、松山市議会議員海外都市行政視察は継続して実施することが申し合わされた。

その決定を受け、改選後初の海外都市行政視察を実施するにあたり、昨年の7月下旬から期別年齢順に議員の参加意思を確認、同じく8月には第1回打ち合わせ会において団長、副団長の選任のほか、各派代表者会議から申し送られた検討事項を元に海外都市行政視察の見直し方針を協議の上、視察時期、視察内容を慎重審議し、まずは今回の調査研究テーマを「防災対策」「観光振興」「平和行政」「国際交流」「水資源対策」とした。同年9月3日、第2回打ち合わせ会においては決定した調査研究テーマに沿って視察先、視察日程を協議したほか、成果報告の充実について、及び業者提案提出日と審査会の日程決定を審議したものである。

視察時期については、折しも2010年は、外務省が「2010年 トルコにおける日本年」と位置付けた年である。トルコと日本はもっと近くなれるという信念の下、この「日本年」の重要目標として、1. 日本の魅力に親しんでもらう、2. 友好の裾野を広げる、3. 交流を未来へ続けていくことを掲げてい

る。この「日本年」の設定の根拠となるのはオスマン帝国の軍艦エルトゥール号の日本訪問とその後の遭難という出来事を発端とする日本とトルコの友好の歴史は2010年に120年という節目の年になるとともに、イラン・イラク戦争時のトルコ航空機による邦人救出劇は両国の友好を象徴する有名なエピソードである。また、本市の重要課題である水問題の参考となる、「第5回 世界水フォーラム」を一昨年開催し、各国の浄化設備、汚水処理、水道事業、灌漑設備等の最新技術が紹介され大きな成果を挙げている。さらには世界唯一の被爆国である日本という国の恒久平和を願う心情は世界各国に比しても大なるものがあることから、戦争の悲惨さを象徴するアウシュビッツ収容所の視察が日程、及び費用に対して可能であればということで、視察先をトルコ共和国、ポーランド共和国に決定したものである。しかし、残念ながら視察日程に関しては、市長、知事の同日選が予測され、年明けの日程にせざるを得ず、「2010年トルコにおける日本年」に間に合わなくなったとともに、厳寒期の視察となり、団員の仕度費用を嵩ませたことは残念であった。

10月4日、第3回打ち合わせ会を開催し、随員職員を決定し、企画書を審査した結果、日本旅行（株）の企画提案を採用し、同月8日、第1回勉強会において菊池伸英議員の辞職表明による渡部昭議員の承認、日本旅行による内容説明があったが、その後、猪野由紀久議員の辞退による原俊司議員の承認を行う。第2回、第3回の勉強会においては、研修のテーマである「防災対策」「観光振興」「平和行政」「国際交流」「水資源対策」について、担当部から学習、あるいはその調査要



(勉強会風景)

望等を受け、各々、事前に相手方に文書にて要請、12月定例会最終日の12月27日には本会議において派遣承認を受け、本年1月17日、最終打ち合わせ会を催し、同月23日、議長出席の下、出発式を挙行、最初の訪問国であるトルコへ向け出発した。

さて、今回の視察では、特にトルコ共和国の現地スタッフが重要な役割を担うこととなるのだが、出発前の心配をよそに、期待を大きく上回る人材との出会いが、本視察の精度を高める大きなきっかけとなった。



(左から、ムスタファ氏・ニハット氏・春名氏)

トルコでのドライバーはムスタファ氏、ガイド兼通訳はニハット氏で、特にニハット氏は国立アンカラ大学の日本語科を卒業、院生時代、日本語による弁論大会で最優秀となり、日本の文科省の招きで三ヶ月間、筑波大学に短期留学した経歴の持ち

主で、卒業後、国家資格をクリアしてガイドになられた人物である。その優秀さにおいて、訪問先のマンカラ副市長、トルコ文化観光省補佐官、イスタンブール技術大学での教授、ISKI（イスタンブールの飲料水、下水道浄水場を管理する部所）での対応や通訳をこなし、車内ではトルコ共和国の歴史や現状等、詳細な説明を行い、同国での調査事項等に関し、多大な成果を挙げる要因となったものである。

また、視察の全行程を通じ添乗員を務めていただいた日本旅行の春名氏は、渡欧歴120回を数えるベテランらしく、私たちに一切の不安感を与えることなく、常に黒子に徹した中で臨機応変の措置を講じられ、滞りなく視察研修を

進めていただけたことに対し、厚く感謝していることを付記しておきたい。

第1の訪問国であるトルコ共和国は、第一次世界大戦における敗戦から戦勝国の要求を拒絶し、祖国解放闘争を指導し勝利した結果によるローザンヌ条約が調印された後、ムスタファ・ケマルは解放闘争中に組織された、アナトリアとルメリアの権利擁護団を統合して、共和人民党を結成し、党首となった。

共和人民党(C.H.P)の目的は、国家の近代化および見本となった西洋的制度、組織、生活様式の実現化であった。1923年10月29日、最も重要な国家改革である共和制が宣言され、ムスタファ・ケマルは満場一致で初代大統領に選出された。

近代国家および近代社会を形成するためには、宗教と国政の分離及び個人の信仰と良心の自由の提供が不可欠であった。そのため、次々と法律改正を行い、ターバンとトルコ帽の着用の禁止、一夫多妻制の禁止、またトルコ人女性は、ほとんどのヨーロッパ諸国の女性より早く選挙権と被選挙権を得ている。



(ムスタファ・ケマル・アタチュルク氏)

1934年6月21日姓氏法が制定され、その5か月後施行された法律により、近代国家トルコ共和国の建国者、ムスタファ・ケマルに「アタチュルク」(父なるトルコ人)の名誉が与えられた。

1937年にはトルコ共和国が世俗主義(政教分離)国家であることが憲法に明文化された。

アタチュルクの最も大きな理想は多党政治への移行であり、ダイナミズム、的確な予想、力関係の正確な計算、内的小および外的小条件の確かな評価で知られたアタチュルクは、1938年11月10日に現職のまま永眠したが、西欧モデルに則した進歩の道を確認に歩みはじめ、近代化した組織と改革をしっかりと身につけた国を残した。また、明治天皇を崇拜し、その肖像写真を執務室に掲げていたことは有名な話である。

トルコ共和国の国土面積は78万3,602平方キロメートルで、イランを除



く近隣諸国及びヨーロッパ諸国のどの国よりも国土面積が大きい。国土の3パーセントを占めるヨーロッパ側の地方はトラキア、残り97パーセントを占めるアジア側の地方はアナトリアと呼ばれ、東西間で76分の時

差がある。また高地および山地の多い国であるトルコは標高の平均が1,132メートルでありながら国土の75パーセントが耕作可能な土地であり、全人口（女性3,560万人、男性3,590万人）のうち、0～14才の人口は26.3パーセント、15～64才は66.9パーセント、65才以上は6.8パーセントと日本とは大きな違いがあり、年間80万人程度人口が増えている。

教育制度は小学校5年間、中学校3年間の8年間が義務教育で無償であり、高等学校4年間、大学4年間の教育を受けられるが、その先にはトルコ人の権利であり義務であるとの憲法の明文の下、徴兵制が敷かれている。トルコの軍事費は国家予算の30パーセントがあてられ、ガソリン代も日本の倍であるが、

軍は国民に信頼されており、軍に対する不満はないようである。学校はもとより、公的施設では必ずアタチュルクの肖像写真と国旗が飾られている。

宗教に関しては、国民の99パーセントがイスラム教徒であり、他の1パーセントにはユダヤ教、キリスト教がある。他のイスラム社会同様、朝6時からモスクからの合図で1日5回の礼拝が行われるが、強制ではなく、モスクの聖職者は「せんせい」と呼ばれ、大学の神学科を卒業し、国家公務員として採用され、月15～16万円の収入で生活し、寄付等は受けとらないそうである。

観光に関しては、1980年以後急速に発展し、1980年にトルコを訪れた旅行者は約128万8,000人だったが、2008年には2,633万6,000人に増加し、観光収入は3億2,600万ドルから219億1,000万ドルに増加、海岸部で発展している観光業をアナトリア内部、さらに全国にまで普及するための大規模なプロジェクトが第1回目2004～2006年、第2回目2007～2010年と2段階にわたって実施され、目標は2023年に観光客5,000万人と観光収入500億ドルを獲得することであり、また、2008年の観光収入のGDPに於ける割合は3パーセントである。さらには、トルコ国内で、ユネスコの世界遺産の指定を受けているのは現在9ヶ所であるが、将来的には、実に23ヶ所に及ぶ指定をめざしているとのことで、たいそう驚かされた。

トルコの交通事情、公共交通に関しては、イスタンブールを起点とするオリエント急行は有名であるが、他は都市間を結ぶ鉄道はなく、大方はバスでの移動であり、現在国においてイスタンブール、アンカラ間的高速鉄道を建設中で、一部開通しているものの、全線開通には今少し時間がかかるようである。完成すれば、アンカラ、イスタンブール間450キロメートル余りを約3時間で結ぶとのことである。高速道路は現在、アンカラ、イスタンブール間の一路線だ

けで、初めてトンネルを抜いたが、このトンネルは地震にも被害を受けなかったそうである。路線バスとタクシーであるが、一部市営のバスがあるものの、大方が個人の経営するバスであり、個人のタクシーである。路線バスの権利は売買できるが、その価格は約1億円と高く、タクシーにしても800万円位で権利の売買がなされているとのことである。イスタンブールにしろアンカラにしろ、トルコには駐車場というものがないかのように路上駐車、それも左右両側に駐車しており、一部二重駐車をしているので市内全域で渋滞しているが、運転手の技量はたいしたものである。



(イスタンブールの路上駐車)

る。また、トルコには、TOKI という名の国策の住宅建築会社があり、ヴェネズエラとの2国間で、トルコが TOKI による住宅建設を、ヴェネズエラは原油の供給をというバーター協定を結ぶ等、国家間の問題から、豪華マンションの建設販売、庶民用の住宅団地の建設まで、幅広く都市計画に沿って活動している組織があり、地震からの再建や再開発に力を発揮している。

第2の訪問国ポーランドは、1795年から第一次世界大戦の終わるまでの1



23年間、ロシア、プロシア、オーストリア＝ハンガリー帝国の3国によって分割され、国家としては存在していなかった。独立回復を願うポーランド人は幾度となく蜂起を企てるが、すべて失敗に終わっている。

しかし、第一次世界大戦後のベルサイユ条約でポーランド第二共和国が成立すると、以後ヒトラーに占領される1939年までの21年間は、多くのポーランド人が熱烈な愛国主義者であったと言っても過言ではない。だが、オーストリアやチェコを併合したナチス・ドイツは1939年9月1日ポーランドに侵攻する。第二次世界大戦の勃発だ。この時見落とされがちなのは、ヒトラーの侵攻からおよそ2週間後の9月17日には、スターリンに指導されたソ連軍がポーランド侵攻を開始していることである。開戦前にナチス・ドイツとソ連は不可侵条約を結んだが、同時に秘密協定でポーランド分割に合意しており、両国の国境はブーク川とすることに決められていたのだ。ポーランド語で「オシフィエンチム」、ドイツ語で「アウシュビッツ」と呼ばれ知られる収容所は、当初はポーランド人の政治犯が主な収容者であったが、ロシア人もいればロマ・シンティー、いわゆるジプシーと呼ばれた人たちもその対象となったが、何といっても圧倒的に多いのがユ



(アウシュビッツ強制収容所 入所ゲート)

ダヤ人で、当時欧州には約1,100万人のユダヤ人が生活していたが、そのうち600万人が殺されたという。アウシュビッツではそのうち120万人が、第二収容所ビルケナウと併せ殺されたという。アウシュビッツ博物館唯一の日本人公式ガイドである中谷剛氏によれば、その原因はあまりに多くの傍観者がいたためと結論付けている。

なお、今回の海外都市行政視察の各調査研究テーマの報告については、各団員が別途報告書を作成しているので、ご一読賜りたい。

さて、議論を尽くし継続となった、平成22年度の松山市議会議員海外都市行政視察を終え、9日間に及ぶ旅の疲れも癒えぬままに、直ちに机に向かい、凝縮された慌ただしいばかりの視察日程の末の、さまざまな学びの記憶を今紐解いている。

自身、これまで5度の海外都市行政視察参加の経験を持つが、これほど過酷なスケジュールの視察をこなしたことはなく、団員全員が大きく体調を損なうこともなく、無事、視察を終えられたことをまずは喜びたい。そして天候にも恵まれ、危惧していたほどの厳しい寒さに襲われることもなく、予定通りの視察行程を完遂できたのは、団員全員の気構えのなせる業であつたろう。

では団長報告の最後に、廃止をも検討された今任期中初めての海外都市行政視察に臨んだ私たち10人の団員と、サポート役として、さまざまな見直しに貢献してくれた随行員の渡部議事調査課長を含めた11人が、今回の視察にあたり、見直しを行った事柄について触れていきたいと思う。

初めに、経費縮減について。

松山市議会議員海外都市行政視察の実施にあたっては、毎回、視察先、視察テーマ、予算等を仕様として示し、それにかかる議員一人当たりの旅費を市内の大手旅行業者に見積もらせ、金額ではなく、その内容、行程のみを審査の対象とし、業者並びに行程及びかかる経費を決定してきた。

しかし今回は、命題である明らかな経費縮減の実行のために、業者提示する金額をあらかじめ一人当たり3万円減額提示し、企画審査に臨んだものである。当然、予算の差は企画案の随所に見て取れ、もっとも悪い例は、視察箇所数の

減という結果に表れている案もあり、痛し痒しの部分かと痛感もしたが、説明会の時点から企画コンペ参加の旅行業者には、今回の見直しの趣旨をこんこんと説き、協力を依頼してきた中で、選りすぐられた案も提示された。

結果、7社から提出された10案のうち、もっとも提案内容に優れた日本旅行提出の企画を今回の行程として選定したものであり、それにより些少ではあるが、全体経費の縮減が図れたところである。

つぎに、報告手法の見直しについては、今回、一番前進できた部分であると思っている。

これまで視察団の報告書は、議場で配付されるのみで、市民のみなさんの目に触れることは皆無であった。これでは、市民のみなさんから、その透明性を問われても致し方ない。

そこで、今回の視察団の報告書は、市議会のホームページで公開しようということになった。加えて、議場で団長からの視察報告も行うこととした。その模様は、当然CATVとインターネット中継で生放送され、CATVではその後も再放送番組として、繰り返し巻き返しの放映がなされるので、多くの市民のみなさんに情報を発信できることとなる。

最後に、成果反映の部分だが、これはまだ、わが視察団も模索中の段階であり、これが結論とまでは言えないものの、まずは、出発前に学習の手助けをしてくれたテーマごとの担当課に再度集まってもらい、報告書に書ききれない諸々の所感も含めた報告会を催したいと考えている。

各担当課からは、「せっかくの視察の機会なのだから、ぜひ、こうしたことを聴いてきてほしい」と言われていたことも多くあり、それら細部に及ぶ情報を

つぶさに伝える、視察と抱き合わせの新たな仕組みとして、本報告会を今後、機能させていたいと考えているが、これも初めての取り組みのため、定着にはさらなる工夫も必要になろう。

ともあれ、私たち市議会議員は、松山に足らざるものを探り、その答えを先進地に求め、よりよいまちの基盤整備を進めることが各人に課せられた使命であり、そのためには、常に市民の目線に立ち行動することが不可欠である。そうした地道な積み重ねによって初めて、視察で得た成果を現実のまちづくりに生かすことができるものと思っている。

今回の各団員のそれぞれの調査研究テーマでの視察成果が、今後、何らかの形で市政に反映され、市民福祉が向上することを心から願い、私からの視察総括とする。



（於 イスタンブール工科大学 川本団長）

3 視察事項の報告

視察事項（調査研究テーマ）別の団員報告一覧

（国際交流）

- 親日国家トルコを訪ねて 副団長 土井田 学

（市議会制度）

- トルコ共和国アンカラ市の議会制度等について 団員 大西 弘道

（防災対策）

- イスタンブール工科大学における防災対策について 団員 大木 正彦

（平和行政）

- 人権、平和の原点。アウシュビッツ 団員 松岡 芳生

（観光振興）

- トルコ共和国の観光振興について 団員 清水 宣郎

（観光振興）

- トルコ共和国の観光客の動向とその取り組み 団員 砂野 哲彦

（水資源対策）

- 水資源対策について 団員 友近 正

（平和行政）

- 人類の負の遺産、アウシュビッツを訪れて 団員 渡部 昭

（水資源対策）

- トルコ共和国の水資源対策等について 団員 原 俊司

● 親日国家トルコを訪ねて

副団長 土井田 学

平成22年度松山市議会議員海外都市行政視察団に選任され、訪問先と目的を決定する意見交換の初会合が開かれた。

席上、私は迷わずトルコを挙げた。その理由は日本とトルコが交流120年の節目の年であり、世界一の親日国トルコを訪問し、その歴史・文化に触れ、多彩な行事の一端にでも参加できればと考えて提案させて頂いた。幸い団員各位のご賛同を得たが、種々の事情で1月に延期になったのが残念でならない。数回の勉強会を重ねた上、各団員の役割を決定、私は国際交流を主に担当することとなった。

1月23日、午前7時過ぎ松山空港へ集合、結団式の後いざ出発、トルコ到着は深夜、7時間の時差をものともせず全員元気。超多忙過密スケジュールの始まりである。

2日後25日、トルコの首都アンカラの土日基金文化センターを訪れる。ここは当時のデミレル首相の直接指示のもと1993年設立された日本・トルコの友好促進を目指し、2国間交流活動の拠点として文化、経済等あらゆる方面において両国の架け橋となる機関で1998年5月開館、日本語講座の実施や日本文化の紹介、図書室・展示室・他目的ホール等があり、充実した活動を行い、トルコと



(ファーセリク理事とレイラ女史)

日本の交流促進の中心的役割を担っている施設である。又、日本語が堪能なトルコ人スタッフや日本人のスタッフも働いていて親しみを感じた。

玄関ではゼネラルマネージャーのレイラ女史やベファ―セリク理事始め多数の職員の出迎えをうけ、やや緊張の面持ちでトルコ語でギュナイドン（おはようございます）と挨拶すると日本語で（おはようございます）と返され、一遍に緊張がとけた。さすが土日友好の拠点である。

早速、昨年 1 年間を通じ催された「トルコにおける日本年」の各種行事を映像で紹介して頂いた。

説明をうけている間に、又しても昨年訪れることができていたらなあという思いが湧いてきた・・・。

案内を頂いた図書室の書架に「坂の上の雲」の本を見つけた時はちょっと嬉しかった。スタッフの方にこの本読みましたかと尋ねると「ニコッ」と笑顔の



（図書室で説明を受ける）

返事。どっちかわからなかったがこちらも「ニコッ」と返した。

日本語教室では週 1 回 4 時間の授業を 9 5 名の方に行っているとのこと。大いにやっていただきたい。一人でも多くのトルコの若者が日本語を学び日本を理解して親日家

になって下さることを望みたい。

ベファ―理事は日本に留学経験があり日本語もお上手、私達が愛媛から来たと知ると新居浜に数年前所用で訪れた思い出話をして頂き、愛媛を懐かしがって下さった。又、日本とトルコの交流の原点となった、1 2 0 年前のエルトゥールル号遭難事件の生存者をオスマン帝国の首都イスタンブールまで送り届け

た日本海軍の「比叡」と「金剛」には、後の日本海海戦で東郷司令長官の参謀を務めた秋山真之が少尉候補生として乗り組んでおり、彼が松山出身であることを力説した。

感心したのは各室全て、トルコ共和国の初代大統領ムスタファ・ケマル（アタチュルク）氏の写真とその説明書、さらには国旗が掲げられていたことである。建国者にアタチュルク（国の父・父なるトルコ人）の名誉を与え、今なお尊敬し続けているトルコ国民に敬意を表したい。



（各教室内の初代大統領ムスタファ・ケマル氏の写真）

印象深いのは各視察先で川本団長が挨拶の中でエルトゥールル号遭難事件からの日本・トルコの交流関係、1985年のイラン・イラクの戦争におけるトルコ航空機による215名の日本人救出の御礼を述べられ、トルコの方々が大きくうなずいて握手を求めて下さった姿は忘れられない。まさに我が意を得たりである。

日本の国旗を太陽とし、トルコの国旗を月にたとえ「2つの友、太陽と月」と形容した土日基金文化センターから頂いたDVDの文字に感動を覚えた。悠久の歴史の国トルコ、9カ所の世界遺産を誇る国トルコ、アジア・ヨーロッパの出会う街、オリエント急行の終着駅の街イスタンブール等、思い出は尽きない・・・。

遠くて近い国トルコとの一層の交流促進を願いつつ全員無事帰国。

感謝

● トルコ共和国アンカラ市の議会制度等について

団員 大西 弘道

トルコ共和国アンカラ市は、人口約３９８万人でアナトリア高原西部に位置するトルコ共和国の首都である。１９２３年のトルコ共和国誕生の際に首都に定められ、都市としての歴史は深く、現在も市内のあちらこちらに当時の遺跡が残っている。

１月２５日、トルコ共和国アンカラ市庁舎を訪問した。議場を見学し担当者から説明を受けたのち、副市長室に案内され、アリ・ギュクシン副市長からトルコ共和国及びアンカラ市の議会制度等について説明を受けた。



（議場内での説明）

アンカラ市の予算は年間約２，０００億円である。ただし、この予算に教育に関する予算や警備に係る予算は含まれていない。教育や警備は国で責任をもって取り組む必要があるとのことからトルコ共和国が直轄で行っているとのことであった。このことは、日本との大きな違いでありトルコ共和国の特徴であると感じた。また、国会議員の住居に関しても以前は国で用意した立派な住宅であったが、現首相が選出されてからは全て民営化となり、議員は特別なところに住むのではなく、市民と同じアパートやマンションに住むことになり国民からも支持をいただいているとのことであった。

経済や雇用の現状については、軍隊に関係する産業が中心であるが、アンカ

ラ市では家具の製造業も盛んである。失業率は約10パーセントで経済成長率は約7パーセントである。とかく成長率と失業率を比較するが、トルコは2001年までは成長率はマイナス2パーセントで、失業率は約15パーセントであったが、現在は経済も発展しているので、この数字だけで単純な判断はできないとのことであった。私も数日ではあるがアンカラ市内に滞在したが、街に活気・熱気があふれているのを直接肌で感じた。

続いて、アンカラ市の議会制度等について説明を受けた。市長と議員は選挙で選出され、市長が議長となっている（同一人物）。副市長は市長が任命し、副市議長は選出された議員による選挙で2名選出されているとのことであった。



（副市長室での質疑・応答）

また、任期は市長、議長ともに5年間で、副市長は市長が任命することから、最長は5年間であるが任期を定めていないとのことであった。議員の任期について、5年間は長くないかの質問に対し、多数の議員が長いと考えており、本市と同じ4年間がいいと考えているとのことであった。また、議員定数については103名で党派別では公正発展党が59名で与党、共和人民党が26名、民族主義者行動党が18名となっている。余談ではあるが与党公正発展党の特徴として、国会議員は3期15年までとしており、再出馬はできないとのことであった。報酬は会議出席日数で異なるが、1か月約15万円から16万円となっておりボランティアと位置付けられているものであった。議員の選出方法については、アンカラ市は16の区があるが、その区長全員が議員とし

ての身分を有しているとともに、区の人口規模により議員数が定められており、区長・議員とも選挙で選出されているとのことであった。

私が特に興味を持ったのは、アンカラ市の会議の開催方法等についてである。会期については、法律で毎月最初の1週間5日間で区役所の区議会議員が会議し、第2週にアンカラ市議会を開催することとしている。この仕組みは特徴があり、区議会議員が自分の所属する区の中で要望事項等をまとめ、次の市議会で議長に報告し審議するものであった。現在、本市においても特別委員会を設置し、各種改革事項等の調査・研究を行っているが、開かれた議会や地域の意見を市政に反映する方法として参考になるものであった。

また、本市と同様にアンカラ市議会においても毎年海外視察を行っているが、机上論だけではなく、直接その土地の文化や経済を肌で感じ、市政へ反映することは大変重要であり、意義のあるものであるとのことであった。

最後に、公務多忙にありながら直接対応をしていただいたアリ・ギュクシン副市長をはじめ、アンカラ市議会関係者に感謝を申し上げ私の視察報告とする。



(アリ・ギュクシン副市長)

● イスタンブール工科大学における防災対策について

団員 大木 正彦

海外都市行政視察団員として訪れた、「トルコ共和国の防災対策」について次のとおり報告する。

トルコ共和国は地中海から中央アジアにのびる地震ベルト地帯に位置し、非常に地震が多発する地域である。私たちの記憶に残っているのは、平成11年8月のトルコ大地震であり、死者約1万7千人、負傷者約2万4千人という未曾有の大災害であったことは記憶に新しい。

同国は、地震被害の軽減を重要課題のひとつとして位置づけており、建物の耐震構造の研究と地震被害状況の正確な把握システムの確立のため、日本へ援助プログラムの要請を行っている。これを受け、我が国はJICA（独立行政法人国際協力機構）を中心に援助プログラムを開始している。

視察中、同国イスタンブール市のイスタンブール工科大学トルコ地震防災研究センターを訪問し、ハサン・ボドウロールセンター長などから、両国の関係を中心に説明を受けた。同センター長からは「私と日本の関係は古く、初めて日本を訪問したのは昭和63年で、1ヶ月間地震エンジニアと地震についてのセミナーを受けた」という説明があった。そのセミナーでは21か国の関係者が出席し、日本の地震防災の知識や技術の高さに感銘したとのことであった。



（ハサン・ボドウロール センター長）

このような経験から、日本と更なる関係を構築できないか J I C A に相談したところ、平成 5 年に両国間で①強震観測網実験サブセンター、②地震工学実験サブセンター、③教育訓練サブセンターの 3 つの援助プログラムの開始が決定され、同大学では、②の地震工学実験サブセンターのプログラムを担当することになった。また、このプログラムを通じて「トルコ地震防災研究センター」が設置されるとともに、多くの修士、博士の教育を受けた人材が育ち、さらに、「平成 12 年には国際的な地震フォーラムが開催され成功裏に終わったことに対し、日本政府や J I C A に大変感謝している」とのことであった。

私はこれらの説明を受けながら、地震防災については日本が先進国ではあるが、同じ課題をもつ同国に対して人材育成まで寄与していたことを誇りに思った。

また、同センター長から、「日本には日本、米国には米国の建築文化がある。本国にも当然建築の文化があることから、現在、その建物にあった建築システムについてもさらに研究をつづけている」との説明がなされた。



(総合防災計画等の質問)

これらの説明を受けた後、私から同国における総合防災計画や災害時の支援体制等の質問を行った際、同国の取り組みについて次のような興味深い話を聴くことができた。

現在、トルコでは法律で住宅に地震保険に加入するよう義務付けており、保険金を請求する際には、被害状況をチェックし、レポートを提出するようにな

っている。また、そのチェックシートを同氏のチームが設計したということを知ることができた。

次に J I C A プロジェクトの協力により設置された研究センター内で、現在、在籍中の学生から、オスマントルコ時代及びビザンティン時代から残っている建造物の地震対策、研究中のカーボン柱等についての説明を受けた。



(トルコ地震防災研究センター内)

さらに、同センターの大きな研究成果として、通常 10 年間かかる柱の錆の調査を 1 年間に短縮することに成功した事例について詳細な説明を受けた。また、同大学の教育課程は通常 4 年間、修士はさらに 2 年から 3 年であったが、研究の中で新しいシステムの知識習得が必要となったことから、さらに 1 年間加わったとのこと。私は、これらの説明を熱心にする学生を見て改めて J I C A プロジェクトの成果の大きさを直接肌で感じた。

最後に、ハサン・ボドウロールセンター長をはじめ、イスタンブール工科大学関係者に感謝を申し上げ私の視察報告とする。

● 人権、平和の原点。アウシュビッツ

団員 松岡 芳生

ヨーロッパ1, 100万人のユダヤ人の内600万人。ロマ・シンティ（ジプシー）100万人の内25万人。その他、ナチス・ドイツ侵略に抵抗したポーランド人、ロシア人捕虜、そして身体障害者等々、想像を絶する虐殺、ホロコースト。人類史上、最悪とも言える非人間的行為が何故おこったのか。戦争は最大の人権侵害、人権破壊といわれているが、広島原爆ドーム同様、負の世界遺産であるアウシュビッツ（現オシフェンチム）は、人権、平和の原点として、ぜひ一度訪れてみたい念願の場所であった。

アウシュビッツは、ポーランドの南端、チェコ・スロバキアの国境に近く、寒い年であれば、マイナス40度を超える事もあり、今年は暖冬との事。それでも、訪問した日はマイナス6度。路面は凍り、木々は霧氷で真っ白。まさに氷の世界。この地で、1940年6月14日から1945年1月27日の1, 686日間で、100万人以上の人達が毒ガスや銃殺、人体実験で尊い命を絶たれたかと思うと、外気以上の寒さに身が震える思いがした。



（囚人番号の記された 追悼の花）

当日、案内して頂いたのは、アウシュビッツ博物館、唯一の日本人公式ガイドの中谷剛氏（45歳）。氏は神戸出身の方で、小学生の頃、関東へ転校した時、

言葉や文化の違いによる「よそ者」という疎外感を持ったことが、この地へのこだわりの原点との事。

収容所は、第一から第三まであり、博物館として公開されているのは、第一、第二収容所。第一は20ヘクタールの敷地に約2万人、第二は140ヘクタールに約10万人が収容されていたとの事。アウシュビッツと同じ様に絶滅収容所と呼ばれていた収容所がポーランドに6カ所あり、中でもこの地が有名なのは、虐殺した人数の多さ、その方法の残虐さからきているとの事。



(左 公式ガイド 中谷剛氏からの説明)

第一収容所には、焼かれる前に死体から刈りとられた髪や、衣服、靴、眼鏡、義肢、義足等々、ユダヤ民から没収したものが、山と積まれ、その光景に思わず絶句せざるを得なかった。

なお、髪の毛は糸や靴下等に加工するためにドイツの衣料品会社や絨毯製造工場へ販売されていた。

第二収容所に貨物列車でヨーロッパ各地から連行されてきた人達は、ナチス・ドイツの医師によって労働力として使えるかどうかの基準で、毒ガス室へ直行か、強制労働かの選別がされ、その比率は75対25。もちろんほとんどの子ども達（20万人余）は、前者である。

ユダヤ民、ロマ・シンティの詳しい歴史的経緯についてふれる事はできないが、国を持たない「よそ者」として、過去から差別、排除されてきた人達であり、その上に、ヒットラー、ナチス党の様な、民族の優位性を信じる、偏狭的な体制が重なり、引きおこされた、あまりにも悲惨な出来事である。

医学、技術、哲学等々、様々な分野で世界のトップクラスにあったドイツ人が、何故この様な事を引き起こしたのか、未だに謎は多い。唯、言えるのは、ヒットラー、ナチス党だけの責任だけではなく、多くの傍観者や、無関心層が、ここまで突き進ませた大きな要因との中谷氏の重い指摘と「過去に目を閉ざす者は、結局のところ現在についても盲目となる。非人間的行為を心に刻もうとしない者は、また、そうした危険に陥りやすい」アウシュビッツの基本理念である、ナチス・ドイツ敗戦40周年記念式典における、当時の西ドイツ大統領、ヴワイゼッカーの演説の言葉が、戦争にあげくれた人類の過去を断ち切り、私達が進むべき未来を示唆しているように思う。



(第2収容所 ビルケナウ敷地内)

パレスチナにイスラエル国家を樹立したユダヤ民は、一転、イスラム教社会と血と血で洗う宗教戦争の只中にあり、なんとも言えない無情を感じざるを得ない。

体制を「壁」個人を「卵」に例え、「私はいつも卵の側

に立つ」という作家の村上春樹氏が一昨年の2月にイスラエルの文学賞「エルサレム賞」の現地授賞式で行われた記念講演でのメッセージの真意がイスラエル国民に届く事を祈らずにはいられない。

限られた枠の中で、伝えきれないもどかしさを感じながら足らざる部分については、今後の議会活動の中で補足させて頂く事を申し添え報告とする。

● トルコ共和国の観光振興について

団員 清水 宣郎

平成22年度海外都市行政視察団の団員として参加するに当たり、私の所属する産業経済委員会委員の役割として、また、本市において観光客数600万人を目標に様々な施策を推進し一定の効果は出ているものの、これらに加え更なる取り組みを研究する必要があるのではないかと考え、調査研究テーマを「観光振興」としたものである。

さらに、今回の視察では、世界遺産を見学するだけでなく、トルコ文化観光省で直接国の施策について説明を受けることが可能となったことから、より効果的な視察になるものと確信した。



(トルコ文化観光省)

トルコ共和国は、人口約7,151万人、面積は約78万3,602平方キロメートル（日本の約2倍）で首都はアンカラである。民族はトルコ人でバルカン半島の東南端のヨーロッパ・トルコとアナトリア半島に位置するアジア・トルコの2つの

地域からなっている。また、ヨーロッパ・トルコの大部分は平野でアジア・トルコは2,000メートルを越える高山が多い地域である。このようなトルコ共和国は東西の要路にあたり、古代から開けた地域であった。13の文明が栄え、ヒッタイトやペルシア、マケドニア、ローマ、ビザンティン、セルジューク、オスマン時代を経て現在にいたっており、特に世界史で重要な位置を占め

るとともに、歴史的遺物も豊富に点在する国である。

1月26日、トルコ共和国アンカラ市にあるトルコ文化観光省を訪問し、オズギュル・オズアスラン大臣補佐官から、同国の進める観光施策等について説明を受けた。トルコと日本の関係は、世界の中でも数少ない友好国の一つで、日本からの訪問者も多く、観光面だけにかかわらず成長・発展を続けている。

2010年にトルコを訪れた日本人は、19万5,000人を超え、2009年に比べると約30パーセントの増加となっている。また、世界各国からの旅行者は約2,800万人を超えたとのことであった。



トルコ国民は観光業を営む人たちを （右 オズギュル・オズアスラン大臣補佐官）

含め、皆、日本人を大切にしている。これは、120年前に起こったエルトゥール号事件が大きな要因ではあるが、一番に挙げられるのは、戦後、日本が大変苦しいときに様々な努力を行い、世界でも1、2を争う強い産業や経済力を持つとともに、古くからの日本の伝統文化を揺るぐことなく守ったことに対し、尊敬の念を抱いているものであるとのことであった。先人に感謝するとともに日本人として誇りに思えた瞬間であった。

トルコの観光施策で興味深いものがあった。トルコでは9つの世界遺産に依存するだけでなく、1982年に新たな法律を制定し、観光業に対する投資や税に対し優遇措置を設けたことから、飛躍的に観光業が発展するとともに、観光客も増加しているとのことであった。また、海外に向けた観光宣伝やビザの義務化を緩和したことも、その要因のひとつであるとのことであった。

このような取り組みの中で、観光業に対する優遇措置等は、本市においても十分検討が可能であることから、今後、私の所属する産業経済委員会においても研究を行う必要があると感じた。



(於 トルコ文化観光省)

また、同大臣補佐官から心に残る一言があった。我々視察団に対し「私たちは、ここにいらっしゃる皆様を日本にいる、松山にいるトルコの大使、総領事と思っています。トルコの良さをぜひとも伝えていただきたい」とのことであった。

こういった考え方は、私たち議員はもちろんのことではあるが、本市職員や市民の皆様にも常に心にもっていただき、あらゆる場所で日本、松山をPRすべきであると感じたものであった。この後、同大臣補佐官から、「トルコに来ていただいたからには、絶対にイスタンブールにあるブルーモスクを見学してください。そうでなければ私が大臣に説明できません。」と熱心に勧められ、急きよ日程に加え視察を行った。

今回の視察では、世界遺産のカップパドキアの地下都市やイスタンブールのブルーモスクも見学したが、やはりその国の文化や歴史を全面的に押し出した観光資源が、最大限の魅力であるとともに、心に深く残るものだと直接肌で感じたものであった。

最後に、今回の視察の経験を活かし、本市観光振興の一翼を担うとともに、オズギュル・オズアスラン大臣補佐官を始めトルコ文化観光省関係者に感謝し、私の視察報告とする。

● トルコ共和国の観光客の動向とその取り組み

団員 砂野 哲彦

「観光振興」のテーマ担当として、私からは、トルコ共和国の観光客の動向とその取り組みについて報告する。

1月23日、寒気厳しい中、松山空港にて午前7時30分から出発式を行う。田坂議長、遠藤理財部長、宮崎議会事務局長はじめ、多くの見送りを受け、団員議員10名、随行者の渡部議事調査課長の計11名で元気良く出発した。成田からトルコ航空で、イスタンブールへ、そこからさらに乗り継ぎカイセリに到着。長旅のため疲れ気味であったが、深夜1時もまわる中、なんとかホテルへたどり着く。

翌、24日の早朝からは、早速、専用車でトルコ中央部アナトリア高原にあるギョレメ国立公園へ向かう。トルコ国内に9つある世界遺産のひとつであり、ペルシャ語で「白馬の国」という意味の「カッパドキア」のキノコ岩や洞窟、地下都市などの視察を行う。大自然が作り上げた幻想的な奇岩群と、初期キリスト教徒によって彫り造り上げられた地下都市や修道院、教会などが集まる地域は、豊富な地下水により発展してきたもので、ユネスコの世界遺産に指定された現在、世界中の注目を集め、訪れる多くの観光客を魅了している。



(カッパドキア キノコ岩)

市などの視察を行う。大自然が作り上げた幻想的な奇岩群と、初期キリスト教徒によって彫り造り上げられた地下都市や修道院、教会などが集まる地域は、豊富な地下水により発展してきたもので、ユネスコの世界遺産に指定された現在、世界中の注目を集め、訪れる多くの観光客を魅了している。

世界文明、世界文化の交流する都市 イスタンブールを含む、国内各所に散らばる9つの類まれな観光資源を有するトルコの観光産業は、1982年以降、観

光産業を育てる法整備により急速に発展した。1980年にトルコを訪れた旅行者数128万人に対し、2008年は2,633万人に増大し、観光収入は3億2千万ドルから219億ドルに増加した。

近年、夏のバカンスには、ドイツをはじめとするEU各国やロシアからも多くの観光客がリゾートを求め訪れる。それにより、トルコ西部、南部域の海岸部では観光産業が急速に発展している。その波を、まずはアナトリア地方の歴史的、文化的観光とつなぎ合わせ、さらに温泉や世界遺産、古代都市遺跡などの観光資源や全国各地に点在するそれぞれの地方の魅力的な施設と組み合わせることで、ひとつの大きな観光振興の流れを全国に拡大させるべく、今トルコでは、大規模なプロジェクトが進められている。1982年の法整備以来、トルコ史上第2の観光開発であるこのプロジェクトは、2004年から2006年、そして2007年から2010年と2段階にわたり実施されており、2023年には観光客5,000万人と観光収入500億ドルの獲得をめざすものだ。2008年の観光収入のGDPにおける割合は3%である。さて、トルコの観光産業における新戦略とは。

1月26日、トルコ文化観光省を訪問し、大臣補佐官オズギュル氏からレクチャーを受ける。氏によると、省ではトルコの観光新戦略の一環として新たな広



(左 オズギュル・オズアスラン大臣補佐官)

報活動を展開している。2008年にスタートした観光キャンペーンからは観光物産品の宣伝にとどまらず、時間をかけ、地中海沿岸の比類なき自然、観光施設、交通の便利さ、豊かな文化遺産などを前面に紹介することにより、トルコをもっとも有名

な観光国のひとつにするという。紹介事業の予算は1億4千万ドルに増額された。その甲斐あって、2010年の外国人観光客数は2,800万人に増加し、観光収入は世界の10指に入る。ちなみに、トルコと日本の120年記念事業を大々的に敢行した昨年の日本人観光客は、19万5千人で前年の30%アップで、日本人にとって親日国 トルコは、今後さらに身近な国になっていくこと



(於 トルコ文化観光省)

が期待される一方、日本はトルコからの誘客に、改めて力を入れていくべきではないかと実感したところである。

8泊9日の海外都市行政視察を終え帰国した翌日に、折しも、松山市議会観光振興議員連盟による外国人観光客誘

致学習会が開催され参加した。外国人から見た本市の観光ということで話し合いが行われ、やはり、言葉、交通手段、食事等についての改善策が種々協議されたが、その一方で参加の外国人のみなさんからは、「松山の人はみんなやさしい」との好評価もいただいた。観光都市を標榜する松山市としては、外国人が安心して散策でき、心から楽しめる観光地をめざし、あらゆる整備に努めなければならないと、自身、改めて考えさせられたが、観光産業に携わる方々には、これまで培ったホスピタリティ、いわゆるおもてなしの心で、今後も引き続き、自信をもって観光振興に取り組んでいただきたいと思う。

本市の観光が、本市経済の活性化をけん引していくことを心から願いつつ、視察に基づく調査研究の報告とする。

● 水資源対策について

団員 友近 正

今回の海外行政視察において、私は特に水問題について調査研究する事となり、その第一点目にトルコの世界遺産でもあるカッパドキア地方の水事情を調査した。この地方はローマ帝国の弾圧を逃れ、また、ペルシャやイスラム勢力に包囲されたキリスト教の修道士が三世紀半ばから住み着いた地方であり、脅威から逃れる為、この地方特有の柔い岩盤大地をくり抜き生活を地下で営むこととなった。当然、地上には河川もあるが、水が地下に浸透しやすい土質であるため、地下水を当然のように利用した。最初のころは地下水も30メートル位と浅く、生活するにも不便は少なく十分であった様だ。年が経てば水位は下がり今では120メートル位と言われている。このことは松山市においても同じで、今は地下水も浅井戸が多く利用されているが、年が経てば気象条件にも左右されるが、深井戸が主流を占めてくることが考えられる。カッパドキアでは畑の水は雨が降れば一時的に雨水が利用されるが、多くの畑が井戸水を利用している様で、それぞれ畑には井戸を掘り、小屋で囲っている様子が多く見ら



(カッパドキア 地下都市)

れた。人が生きる為には水と作物は必ず必要であり、水問題を考える中で世界人類が水問題で紛争になるような事が起こらない様、協力し合える世の中を作る必要があると改めて考える事ができた。

私の感じたイスタンブールの上水道整備事業は、あまりにも事業の考え方と予算の組み方が莫大なものであり圧倒された。国土も日本の倍以上で、その内、平地が60パーセント以上と日本の平地30パーセントとは比較にならない。その上巨大なダムが多数あり、其々のダム間が融通管で繋がっており、年間予算が米ドルで約20億ドルと言われ、1893年よりダムを作り始め計画的に人口増加を見込み施工され、ほとんどの水をダムの水で賄っている。導水管に直径3メートルから3.5メートルの耐震用鋳鉄管を使用しているのは、松山市では考えもつかない大きさであり、とてつもない大工事で、大胆に出来る事は日本では想像もつかない点であった。しかし、今、松山市では耐震用ダクタイル鋳鉄管を使用するとともに、水質の管理にメダカなどを利用しているが、地下宮殿などの水質管理にも小魚や鯉が飼われているのが確認でき、昔から今と同じ方法がとられている事は安心することができた。



(ISKI 市水資源確保部署内)

また、国から独立したISKIと言う機関があり、そこで私たちはビデオを見ると同時に質疑を行った。時間の制約もあり、あまり質問も出来なかったが、やはり水質は日本と同じように拘り、浄水場も各地各所に配備し、毎日検査を行っており、

その水は直接飲んでも構わないが、私たちは飲料用にはペットボトルの水を使用するようにしていたとのことであった。何故かと聞くと、ホテルや建物が古く配管が古い為、その管の錆や汚物が一緒に出ることが多いのが、その理由であるとのことであった。

特に私が驚いたのは、今まで水道の有収率が50パーセントだったのが、今では約70パーセントになった事を自信を持って言われたので、一瞬私は70パーセントでは30パーセントの費用が無駄になっていると思い、松山では96から97パーセント位であると言うと、イスタンブールでは管が古くまだ漏水しているところもある上に、水泥棒をする人がいるとのことであったため、松山では水泥棒は考えられないことであると言った。ISKIの人はあまり経済的な事は考えないようで、十分な良い水が市民に供給されればそれで自分たちの仕事が出来ていると思っているように感じた。

下水道の話もあったが日本とあまり技術的な差はないように思うが、処理場などを建設するのに広い土地を利用できることは日本より利点である。今後の事も考え再利用水も今は部分的に利用しているとのことだが、海洋汚染問題や地球温暖化問題に対して全世界が一致協力出来る様、各国で改めて考える必要があると思った。



(ISKI 市水資源確保部署)

● 人類の負の遺産、アウシュビッツを訪れて

団員 渡部 昭

今回の視察では「平和行政」に関するテーマを選択した。視察先は、ポーランド共和国にあるアウシュビッツ収容所への訪問である。

第二次世界大戦中ナチス・ドイツは、占領地のユダヤ人、ポーランド人、ロマ、共産主義者、反ナチ活動家や同性愛者などを捕え、各地の設けられた強制収容所に送り、ある者は即座に殺され、ある者は過酷な労働に従事させられたのち殺された。大戦中に殺戮された人数について確たるものはないが、数百万といわれ推計では600万人程度ではないかとも言われている。

ドイツ名が「アウシュビッツ」で、ポーランドの政治犯が最初に収容されたのは1940年6月14日であり、その日から強制収容所としての機能を始めたとのことだ。

ここで殺された人々の数は28の民族で、150万人に上ると言われている。

収容所は当時のままの状態で保存され、博物館として公開されており昨年は138万人（日本人7,000人）が訪れている。

収容所の入口には、「ARBEIT MACHT FREI（働けば自由になる）」との文字があるが、強制連行された方々はどのような思いで、この入口を通ったのだろうか。

収容所内の28の棟には、①隠れて撮った戦争犯罪の証拠を示す写真、



（アウシュビッツ強制収容所 入所ゲート）

②ガス室で大量殺人に使われたチクロンBという劇薬の容器、③カーペットなどに用いるための、膨大な量の女性の髪の毛、④連行した人々から没収した衣服、トランク、メガネ、義足など、⑤収容時に移された子供たちの写真と名簿、⑥監禁室、移動絞首台、立ち牢などが展示されている。

また、この「アウシュビッツ」収容所から約2キロメートル離れた所に、第二「アウシュビッツ」といわれる「ビルケナウ」収容所がある。



(第2収容所 ビルケナウ)

「アウシュビッツ」よりもさらに大規模で、広大な敷地に点々と当時のままの建物が建っている。連行された人々は、線路の尽きた所で降ろされ、ガス室行きと強制労働とに選別されたという。「ビルケナウ収容所」の写真説明には、「ホームに立つハンガリーから連行されたユダヤ人、奥には死体焼却場のガス室と焼却炉が見える」とあった。1941年に建設が開始され、1945年に解放されるまでに約数百万人の命が奪われたという。

そこで、忘れてならないのが「歴史はくり返す」という諺である。ゆえに、平和について学ぶ大切さである。

私たちは、中学校の教科書でこの収容所や「アンネの日記」と絡ませて、ナチのユダヤ人迫害を大きく取り上げることにより、ポーランドの片田舎での過去の出来事を知ることができた。まさしくこのことが「歴史に学ぶ」平和教育における実践の第一歩である。

私たちを案内してくれた日本人ガイドの中谷氏は、「この場所の出来事は人類が犯した過ちとして、永遠に記憶にとどめなければならない。平和を守るための歴史認識と経験を次世代に伝えることこそ、真の意味での人材投資である」

と平和教育の大事さを強調した。我が国にも広島、長崎の原爆記念館や鹿児島
の知覧特攻基地祈念館など、大戦の「負の遺産」の展示場があり、修学旅行な
どを活用し平和教育が行われている。

最後にユダヤ民の殺戮の背景を説明すると、①第一次世界大戦で敗れたドイ
ツは、ユダヤ民を社会混乱の原因と結びつけ、ドイツ国民を解放するための、「ユ
ダヤ民への排除政策」という悪政が常識化し、差別と偏見に対し多くの人が目
をつむったことにある。

②ヒトラーのナチ党と国粋主義政党の連立で議席の過半数を獲得すると、ナ
チス・ドイツの恐怖政治が始まった。学校でのユダヤ民排除の教育、ユダヤ民
の商店や家屋への放火により、耐えきれなくなったユダヤ民は移住の道を選び
始めた。

③こうした時期に第二次世界大戦がはじまり、ナチス政権はユダヤ民を排除す
ることを明らかにした。そして、ユダヤ民の強制移動と殺戮と財産没収による
戦費調達が行われたのだ。

また、殺戮の根源の大本としてガイ
ドの中谷氏が、「当時の先進国ドイツに
おいて、何故、このようなことが起こ
ったのか不思議でならない。それは、
身近な差別や偏見に対し、見て見ぬふ
りをし、自らの手で差別や偏見を解決



(中央 公式ガイド 中谷剛氏からの説明)

しなかったことによる」と強調したことを忘れることが出来ない。

歴史とは振り返り懐かしむものではない。歴史とは学ぶものである。平和教育
こそ真の「人間投資」と言う言葉を再度強調し、結びとする。

● トルコ共和国の水資源対策について

団員 原 俊司

今回、海外都市行政視察において、調査研究テーマ「水資源対策」を担当することとなり、「カッパドキア地下都市」及び「イスタンブール地下宮殿」の見学、並びに「イスタンブール市 ISKI（水資源確保部署）」を訪問し、その取り組みについて説明を受けた。以下、これら項目等について報告を行う。

行政視察の初日、無事トルコ・カイセリに到着したが、7時間の時差があるため、23日の二度目の夜を迎え、翌朝24日、早速、「カッパドキア地下都市」へ向かう。この地下都市は、貯蔵庫、防空壕を基本的な目的として4,000年前に掘り始められたらしいとのことであった。掘り方は、地下水に当たるまで縦に掘り続け、その後、横にと掘り続け、貯蔵庫等のスペースを作るとのことである。縦に掘ることによって、井戸水を確保するとともに、その穴が空気穴となり、この中



(カッパドキア 地下都市)

に何千人入っても新鮮な空気が確保できるとのことであり、さらに、縦穴の利点としてもう1つ、縦にぶら下げることによって食べ物の袋などを簡単に運ぶことができるとのことであった。

27日には、今回の視察項目担当のメインである「イスタンブール市 ISKI（水資源確保部署）」で水事情と浄化設備・汚水処理及び水フォーラムの状況説明などのレクチャーを受けた。

8,000年もの間、イスタンブールにおいて全ての指導者は常に水問題に取り組んでおり、現代では1981年につくられたISKIという組織が、イスタンブール市の水道・排水道・下水道を管理し、人口1,300万人の市民に安定したサービスを提供し、水を守っている。予算は、2011年20億米ドルで、予算の約10%が国からの補助金で運営しているとのことであった。水道料金は、社会的な役割や経済力で決まり、1立方メートルの値段は、住宅では161円、商業・企業は349円、工業用水は361円である。

イスタンブールでは、常に人口増加と共に水源を確保してきた。1999年人口は660万人で、年間水使用量は約426万立方メートルで、2010年人口は1,400万人、2040年には2,400万人ぐらいになるといわれている。このように人口増加が見込まれるイスタンブールでは、地下水源は7パーセントで、ほとん



(ISKI 市水資源確保部署内)

ど使っておらず、オスマントルコ時代からつくられた14もの市保有ダムや人口湖で水源を確保している。そのトルコも温暖化の影響を受け、2006年と2007年に渇水があった。渇水時には、イスタンブール周辺のダムの水位が下がると、アジア側にもヨーロッパ側をボスポラス海峡の下にパイプでつなぎ、また、県境を越えた河川からパイプでつないだり、安定した供給ができるように、国とISKIが共同して開発を行ったとのことであった。

このプロジェクトは、地下水の使用が一部であることと、日本でいう水利権なるものが存在しないのか、国や市のダムは行政の判断でダムや河川をパイプでつなぐということを行っている。2040年まで水資源が確保できていると

のこと、羨ましい限りである。注目すべきは、2007年のプロジェクトは、水道料金を上げることなく（政治的にいろんな影響があるから水道料金は基本的に上げない）また、渇水対策に時間をかけることなく実行していることである。



（地下宮殿）

次に、1,500年前の「イスタンブール地下宮殿」を見学した。宮殿ということではあるが、実は東ローマ帝国の貯水池（貯水量9,000立方メートル）であったとの事。いつも水問題が政治的課題であったので、こういう貯水池はイスタンブールに

たくさんあった。この宮殿で一番有名なのは、髪の毛が蛇で目を直接見たら石になると言い伝えられているメドゥーサの頭が二つ、今でもずっと見守っている。

最後に、トルコの水事情は、まさに時の指導者が知恵を絞り、「命の水」を確保してきたことを思うと、本市においても、水の確保のために、先人たちが努力や判断を重ねた結果が、現在の本市水事情である。

古代ローマから現代までの水問題に取り組んできたトルコの壮大な歴史を感じ、私たちは、最低でも50年100年先まで考えた解決のため、徹底した調査と情報開示を行い、水道料金は上げないという基本方針で、市民と共に議論していく必要があるのではないだろうか。

4 結び

今回の視察でお世話になった、主な方々をご紹介します。



(トルコ共和国全般)

左：ドライバー ムスタファ氏

中央：ガイド ニハト氏

(視察全般)

右：添乗員 春名浩治氏



(土日基金文化センター)

右：理事 ベファ・チェリク氏

中央：理事 ヌル・カラコチ女史



(トルコ共和国 アンカラ市議会)

副市長 アリ・ギュクシン氏



(トルコ共和国 トルク文化観光省)

右：大臣補佐官 オズギュル・オズアスラン氏



(トルコ共和国 イスタンブール工科大学)

センター長 ハサン・ポドウロール氏



(トルコ共和国 ISKI 市水資源確保部署)

オルハン・ギョクシン氏



(ポーランド共和国 アウシュビッツ博物館)

中央：同博物館唯一の日本人公式ガイド

中谷 剛 氏



(ポーランド共和国全般)

左：ドライバー トーマス氏

右：ガイド カーシャ女史



以上、ご紹介させていただいた皆様をはじめ、今回の訪問にご尽力いただいた関係者の皆様に心から感謝を申し上げます。

松山市議会議員

海外都市行政視察団一同